

島根の中山間地から Work as Life

第7回

とび込んで、対話しながら、もみ合う

野中 浩一

今回の文章では、日本や世界の変化に伴う「対立、分断、格差」の断片を概観し、それに対するアプローチを「課題解決の当事者性」「島根」「人それぞれ」「いじめ」という観点から考えていきたい。

アントニオ

私はプロレス世代ではない。プロレスよりも先にキン肉マンを知った。幼稚園のときからよく分からず集め始めたガチャガチャのキン消し(※1)。その後、元ネタになっているアニメ「キン肉マン」を知った。超人と呼ばれる異形のレスラー達がリングの上で戦う姿に、自然と馴染んでいた。

プロレス=キン肉マンだった子ども時分の私にとって、ジャイアント馬場やアントニオ猪木はテレビに出ているタレントという認識であり、ものまねをされていたり、昔を振り返る番組で知ったりという程度であった。

その後私が大人になり、アントニオ猪木氏が国会議員になったニュースや、猪木氏の訪朝が北朝鮮から歓待されている一方で国内の一部からは批判されているといったニュースを目にする中で、なにか引っ掛かりのような、興味のようなものを感じていた。そうした思いが募り、先日、長年猪木を撮り続けている写真家の原悦生氏の記録本「猪木」を購読した。

「この道を行けば、どうなるものか。危ぶむなかれ。行けばわかるさ。」90年当時、国連安保理から経済封鎖を受けていたイラクに対し、猪木氏は「私にできる限りのことはしま

す。私があなた方のために何かできることはありませんか」との姿勢で臨み、日本を含めた多くの国から非難を集めていた当時のイラクで、プロレス、サッカー、音楽を軸とした祭典を開催し友好関係を築き、イラクに残されて帰れずにいた日本人の帰国を実現させたとのエピソードが書かれていた。

この部分だけを切り取ると美談めいてしまい実情と反することになりかねない。国際社会（と報道機関が呼称している一部の先進国）の非難の対象となっている国に、いち国会議員として交友を築き、命の危機と立場を危うくするリスクが高い中で渦中に飛び込み、祭典を実現するまでに至った事実。その困難さは並大抵のものではないだろう。

まず相手を理解しようとする。そのために懐にとびこむ。そして一緒に考え行動する。答えを想定してから動くのではなく、動きながら材料を集めて答えに近づいていく。この姿勢は、自国のものさしで悪者を特定し、制裁という名の暴力によって、机上の手続きで（なんの関与もない人も巻き込んで）一方的に締め上げるやり方に強い違和感をもっている私に、課題解決における当事者性の大切さを改めて感じさせてくれた。

時代の先進地「しまね」

『この1年で日本の人口が「島根県の人口分」減少…』というタイトルのWEB記事が目飛び込んできた。幻冬舎 GOLD ONLINE の島原俊英氏の記事だ。

日本の人口が、「2020年からの1年間では約64万人が減少（※2）」し、「ほぼ島根県一県の人口が1年で消えてしまった」と書いてあった。島根県はこういうネガティブな話題の引き合いに出されることが多いなど自虐的な感覚を受けつつも、この危機は、積み重なって身近なところに大きな影響を及ぼすまでは多くの人が見て見ぬ状況にならざるを得ないのだろうとの感想をもった。

またこの記事では、宮崎県による中小企業労働事情実態調査をもとに、人口減少の「経営上の障害」として、「人材不足（質の不足）」と「労働力不足（量の不足）」が挙げられている。この点は経営者として私自身がここ数年、まさに身につまされているところである。

私が運営する松江未来学園において高校生の進路指導をしている中でも、人手不足を実感する機会が多い。島根県内で来年春に卒業予定の高校生のうち就職を希望する1007人に対し、企業からの8月末時点での求人数は3055人（3.03倍）だったと島根労働局が公表しているとおり、人を求める企業は多く、働きたいという高校生は少ない。私自

身、地元中小企業の担当者から「求人を出しても 1 件も応募がない」という声を聞くこともあり、「地方＝仕事がない」といったステレオタイプなイメージに反して、少なくとも島根県の高卒求人は超売り手市場である。

私が事業主として初めて人を雇ったのが 32～33 歳頃だっただろうか。正社員 1 名、パート職員 5 名。あれから 10 年以上が経ち、ハローワークの求人や知人からの紹介等で、年に数人程度の面接をし、総勢 30 名以上を雇用してきた。だからこそ、ここ最近の人手不足に関する危機感、そして今後さらに著しい雇用情勢の変化が起こることへの警戒感が高い。

総務省統計局『世界の統計 2022』によれば、2020 年の日本の中位年齢（人口を年齢順に並べたとき、その中央で人口を 2 等分する境界点にある年齢）は 48.6 歳で、同資料で比較できる 37 か国中で最も高い数字になっている。こうした高齢化は、組織や管理者の側からすれば、そもそも「人を集めることが難しい（量の不足）」ことと、その組織やその業務に「適合していない人でも受け入れざるをえない（質の不一致）」という両面がある。反対に働く側からすれば、旧来であれば「入れなかったような企業に入れる可能性が高まる」一方で、「自分の能力やキャパシティを超えた業務量や立ち回りを求められる」ことになりかねない。

島根県はもともと全国で 2 番目に人口が少なく、全国で 3 番目に高齢化率が高い（※3）。このことから、人口減少の影響が日本の中でも早く実感される地域なのではないかと思っている。そういう感覚があるからだろうか。ここ数年、行きつけの店のいくつかでサービスや接客の質が落ちたような、気配り目配りが行き届いていないような、そんなことを感じるようになった。

豊かさから生まれた課題

テレビのニュースからは「格差」「対立」「分断」といった言葉をよく聞く。この言葉からは、人々の先行き不安、生存が脅かされる緊張感、過剰な防衛本能からくる攻撃性を感じる。

『暴力と不平等の人類史』の中でウォルター・シャイデルは、「所得と富の不平等」が完新世以降、生産資源の蓄積・保存およびそれに伴う社会規範の発達とともに、形を変えながら強化・増幅され、「上位 1 万分の 1」に富を集中させてきたと述べている。そして、こうした持てる者と持たざる者の格差を是正してきたのが「大量動員戦争、変革的革命、国家の破綻、致命的伝染病」といった非業の死を伴う 4 つの暴力的破壊であるとも述べてい

る。裏を返せば、平和で豊かな時世には、余剰の生産および資産の世襲により、政治権力と経済的な利権の影響の下で、富の集中と格差の拡大が顕著になるということでもある。

また、石田光規は「対立を回避するために、他者に対する批判や意見を憚り、気を遣い合うことに重きをおく社会」を「人それぞれの社会」と呼び、「人と無理に付き合わなくてもよい気楽さ」と「つながりから切り離される不安」が同居すると述べている。自身で人づきあいを選べるメリットがある反面、自分が人から選ばれないと孤立する恐れが生じる社会。こうした社会を生きる人たちに「友達といるより一人が落ち着く」にもかかわらず、「友達と連絡をとっていないと不安」が生じているという。このアンビバレントな感覚を表す言葉は、私が普段関わる子どもたちにも当てはまるように感じられる。

さらに石田は「人それぞれの社会」では、互いに関心があるようにみせつつ、つながりから緩やかに退き自らを守る「ゆるやかな撤退」をする性質と、話し相手を選び同じ意見をもつと分かっている人と「結託する」性質をもつと述べている。そしてこうした「人それぞれ」をめぐるさまざまな問題には「相手の姿があまり見えていない」「当事者どうしの対話がない」という共通点があると問題提起している。この当事者性の薄さ、相手を理解しようとする姿勢の希薄は、ものごとを混迷させ、「対立」「分断」を助長する要因となると私は考えている。

以上のように「格差」が是正されるために暴力的破壊を必要とし、「対立」を回避するために人それぞれの「分断」が起こるとするならば皮肉この上ない。そしてこうした「格差」「対立」「分断」の根底には世界が 80 億人にまで膨れ上がることを許容する「豊かさ」がある。

他者への攻撃、それは彼女にとっての防衛

この仕事をはじめ、はじめの 5 年くらいは何度か保護者さんと感情的な対立関係になったことがあった。そのほとんどは一時のものであったが、大きな事態に発展した件が 1 つあった。

かなり以前の話になるが、新入生の女子生徒 3 名と、旧来からいる女子生徒 4 名との折り合いが悪く、お互いが感情的にとげとげした状況、女子のグループにありがちな別グループを疎外するムードで教室がピリついたときがあった。私が呼びかけての話し合いでも事態の収束は見られず、立場が弱く数で劣る新入生の肩身が次第に狭くなっていった。そこで事態を打開すべく、特に攻撃性が強くイライラした感情や不満を口にしてはばからな

い女子生徒 1 人を引き離すことにした。補足であるが、このときの私はまだ、こうした女子の感情的な対立に対する理解が欠けており、お互いの緊張関係を緩め感情を収めるための落としどころが分かっておらず、そのことが事態をより難しくしてしまったと自戒している。

この 1 人の女子生徒のお母さんは入学以前から知っている関係であり、娘のこうした気難しい気質、これまでの学校でも何度も対人関係のトラブルがあったことをよく分かっていたため、今回の対応にも理解を示してもらえるものと考えていた。そして私は入学時に配布していた規約と懲戒規則に基づき、新入生への批判や非難をやめようとする女子生徒に対して、1 週間クールダウンの時間をとり、新入生たちと距離を置いてもらうよう連絡をした。すると「なんでですか？」という強い反発とともに、その女子生徒のお母さんの口から今回の件に関する不満が次々と発せられた。私は想定外のことに困惑しながらも、後日改めて面談の席を設けることにした。

面談当日、女子生徒とお母さん、私（当時 30 代前半）と 20 代の男性職員、50 代の女性職員との 5 名で面談を行った。面談は穏やかならざる雰囲気の中で、お母さんが終始強硬な姿勢で今回の件への不満を言い、一方で私はその感情を受けながらこちらの立場や考えを伝えるという、お世辞にもいい話し合いとは言えない対立による平行線の時間が続いた。そんな話し合いが終わりに近づいたように思われる頃、おもむろに 20 代の男性職員が涙を流して嗚咽し始めた。瞬間、その場にいたほかの 4 人誰もが男性職員の涙に驚き、何が起きたか分からず時間が止まった。すぐに話し合いは再開され、しかし誰もが突然の涙の意味をよく理解できないまま、なんとなく氣勢を削がれた状態となり、ほどなく面談は解散となった。

面談が終わり、私が 20 代の男性職員 Y さんと 2 人になったとき、「さっきの涙はどういう意味だったんだろう」と聞いてみた。この Y くん、私がフリースクールの運営を始めた初年度の（元）生徒であり、その後、高校を出て大学を卒業して私の誘いで働いている職員である。すると Y くんは「野中さんは今回のことで毎日遅くまで頑張ってるのに、なんでこんな酷いことを言われたいいけないのかと思ったら泣けてきました」とのことであった。私はこの言葉を聞き、彼の感情に触れて、半分は困惑し、半分は毎日私の仕事ぶりをすぐそばで見て理解してくれていることへの嬉しさと有り難さを感じた。それとともに、これまで問題自体に焦点を当てて対処しようとしていた自分に気づき、多少視界が開けたような感覚を得た。

これまでの経験上、男子と女子とでは、脳やホルモンバランス、身体能力や社会的立ち位置の差異により、集団の中での緊張場面における行動や対応が異なると感じている。男

子が攻撃的になったときは、「暴言」を吐いたり「叩いたり蹴ったり」するなど直接的に怒りを表現することが多い。一方で女子が攻撃的になると、裏で根回しして「仲間外れ」にすることや、「聞えよがしに悪口や陰口」を言う間接的な手段で攻撃する場面を見ることが多い。また、男子は「競争や対戦」に馴染みやすく、「勝負事で勝ちを目指す」ことが好きで、序列を認め合いながら「上下関係の中で役割を果たす」気質がある。一方で女子は「みんな一緒」の関係が心地よく、仲間だと認識した関係性の中で同調し合い、会話を交わして「共感」を育みながら「身近な地盤を固める」気質がある。(※4) もちろん皆が皆そうとは言わないが。

つまり、私はその女子生徒やお母さんにとっての敏感なポイントを刺激していたこと、当たり前のことであるが、女子生徒もお母さんも排除されたくないのだということに改めて思い至った。そして今回のトラブルの発端、その女子生徒が新入生を疎外し、聞えよがしの陰口で追いやっていたのは、傍から見ればいじめ（攻撃）であるが、本人にとっては傷つきやすい自分が脅かされているように感じられ、その緊張や不安からくる抑えきれない感情が言葉や態度に表れた結果（防衛）であると理解した。既に手遅れではあったが、その後は面談で得た理解をもとに、傷つきやすさによる不安や緊張からくる防衛感覚を意識しつつ、事態の収束に動いた。

この経験から、なにかしらの生徒間のトラブルがあったときは、まず前提として「だれも排除しない」「みんなをファミリーとして包括していく」「一緒に考えて一緒に前に進んでく」という意志を私自身が肚に据えて事に当たっている。そして生徒たちの「責められるのではないか、怒られるのではないか、謝らされるのではないか」という不安と緊張をよそに、私はどちらにも与しないニュートラルな状態で、気楽に「これまでの情報整理」と「双方の気持ちの確認」を行うようになった。そして最後に「あなたはどうしたいの」という問いかけをし、本人たちに関係の決定権を委ねるよう心掛けている。

時代を感じながら日々を営む

これから先の日本（及び先進諸国と呼ばれている国々）において、人口減少の中でいくつもの大きな変化が起こることが予測される。ネガティブな観点からは「経済危機」「倒産や失業」かもしれないし、「大災害」とそれに伴う人員・資金・資材等の不足による対応不全かもしれない。他方、こうしたネガティブな予測を人類史の一場面と捉えたならば、格差を平等化する装置である「戦争」「革命」「崩壊」「疫病」による大きな破壊と再生の予兆と捉えることもできるかもしれない。また、先進国における人口減少とインド・アフリカを中心とした未曾有の人口増加は人類史上類を見ないことであり、世界が連携や協調を必

要とするほどに、対立や分断の火種は尽きないことであろう。

こうした世界情勢の大風呂敷を広げながら、私が島根の片隅で何ができるのかと言えば、わが身がぐらつかないように日々を営み、身近な人が孤立したり疎外されたりしないように小さな場をもつことくらいである。世界と対話し紛争解決に奔走してきたアントニオ猪木氏やカール・ロジャーズに思いを馳せながら。

<語句注釈>

※1 キン消し

キン肉マン消しゴムの略。少年ジャンプ誌上で1979年から1987年にかけて連載されていたキン肉マンのキャラクターを形どった塩化ビニール人形。消しゴムと名乗りながら実際にノートの文字を消そうとするとえんぴつの黒い跡が広がり、消えるどころか汚れてしまうことから、私を含め当時の子どもたちをやや当惑させ、消しゴムの定義とはなにかを考えるきっかけとなった（私見）。

※2 人口の減少

厚生労働省の人口動態統計のよると、2020年における出生数は84万835人、死亡数は137万2755人で、自然増減数は△53万1920人であり、翌年2021年における出生数は81万1622人、死亡数は143万9856人で、自然増減数は△62万8234人である。

※3 島根県の高齢化率

総務省統計局が公表した人口推計（令和2年4月）による。島根県の高齢化率は34.3%で山口県と同率の3位である。島根県より高齢化率が高いのは、秋田県（37.2%）と高知県（35.2%）。

※4 男性の攻撃性、競争心、上下関係

ここで触れている男性の傾向はあくまで本質的なものである。昨今の日本は、男性のアグレッシブな側面が否定されやすい社会であり、かつ高齢化によりその勢い自体の衰えもある。そのため、表向き、現代を生きる男性の攻撃的側面は抑圧されやすく、攻撃性や競争心や上下関係といった特徴は、女性だけでなく男性の中でも否定されやすい傾向にあると感じている。

<引用・参考文献>

原悦生（2022）『猪木』 辰巳出版

石田光規（2022）『「人それぞれ」がさみしい 「やさしく・冷たい」人間関係を考える』 筑摩書房

ウォルター・シャイデル著 鬼澤忍/塩原通緒訳（2019）『暴力と不平等の人類史 戦争・革命・崩壊・疫病』 東洋経済新報社

インターネットによる参考・引用

島原俊英 (2022) 『この1年で日本の人口が「島根県の人口分」減少…近い将来、地方都市の半数が消滅する見通しに真実味』 幻冬舎 GOLD ONLINE

<https://gentosha-go.com/articles/-/46284>

総務省統計局 『世界の統計 2022』

<https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2022a1.pdf>